今日のテーマは
『胃カメラこわい』
わたしは国立病院機構沖縄病院の消化器内視鏡専門医の樋口と申します。
経鼻内視鏡という鼻から入れる細い胃カメラができて１５年ぐらいですが、これにより胃カメラは少し楽になってきたと言えます。★　なぜ、鼻から入れるカメラが楽か　それは鼻から入れたときの胃カメラの先の角度が、ベロの奥の最もオエっと来る部分に触らないからです。
しかし日本では鼻の穴が小さめの人が１０人中２人ぐらいて、鼻から胃カメラを入れると鼻が痛いので、結局口から胃カメラを入れることになります。
残念ながら日本には鼻から入れる胃カメラの恩恵にあずかれない人は２０００万人もいるのです。
特に歯ブラシを口に入れるだけでオエッとくるような嘔吐反射のひどい人たちの場合、口から入れる胃カメラは地獄のように辛いです。★ラジオ局の人はどうか　私自身も内視鏡専門医であるにも関わらず、今だに胃カメラされるのが嫌で嫌で。私の場合、口から胃カメラをされるときに、舌の奥に触るだけでおえっと来るし、鼻から入れるカメラでも、食道をカメラが出入りすることでひどい嘔吐反射が起こります。わたしの場合結局、口からでも、鼻からでも嘔吐反射がひどいからキツイのです。わたしと同じような人は結構いらっしゃいます。
　胃カメラがつらい人に対して鎮静剤という薬を注射することで、意識をぼんやりとさせて、嘔吐反射を起こりにくくする方法は以前からあります。★ラジオ局の人は鎮静剤注射したかどうか、ただし、日本人がそもそも必要以上に我慢強いということか、検診する側が仕事をスムーズに進められることとか、この注射をすると自分で車を運転して帰れなくなるとかいう理由で、検診の胃カメラでは注射をしない場合がほとんどだと思います。日本では「これぐらい我慢しろ」と怒りだす内視鏡医もいるほどです。
しかしこの状況は欧米とは異なります。今から１７−８年前にアメリカ、デトロイトの救急病院の内視鏡室で２年間手伝いをした経験がありますが、アメリカでは胃カメラや大腸カメラの時は必ず麻酔科医や麻酔のトレーニングを受けた専門ナースが患者のそばに居て観察していました。そして、内視鏡が始まって終わるまで程よい量の鎮静剤の注射をしてくれるわけです。アメリカでは注射なしで胃カメラなんてとんでもないという感じでした。麻酔がすこし弱いとき

などは、患者がすごく暴れて、医師が殴られそうになることもありました。
日本では我慢するのが当たり前、アメリカでは我慢しないのが当たり前の感があります。固い棒をいきなり喉に入れられるのであるから、苦しいのが当たり前なのです。日本では胃カメラのときにオエオエがひどかった患者さんがあとで「大騒ぎしてすみませんでした」と謝ることがたまにあるのですが、そんな必要は全くないのです。

昔から日本の胃カメラでは鎮静剤の注射をせずに、喉の表面を麻酔するだけで胃カメラがなされていました。気分がわるくなる苦い麻酔ゼリーは皆さんもご存知だとおもいますが、気持ち悪い上にあまり効かない。追加で苦いスプレーで喉の表面を麻酔することが一般的に多いと思います。これらの粘膜の表面の麻酔だけでは嘔吐反射の強い人はいやというほどオエオエして、大の男が涙を流します。麻酔のゼリーというのは麻酔薬の入った苦いゼリーですが、喉の奥に貯めてと言われて、その通り貯められる人はごく稀であり普通は気持ち悪くてためられません。喉の奥の手前のベロのところに留まってしまい、肝腎の喉の奥の部分に麻酔はかからないのです。その後さらに苦いスプレーを追加してようやく少し喉が少し麻酔されるわけです。

そこで沖縄病院では、鼻の穴が人より小さくて、嘔吐反射が強くてつらい胃カメラを強いられている患者さんに対して、当院独自に麻酔キャンディを作成し、ついこの間完成しました。内視鏡部、薬剤科、栄養科の協力のもとに、麻酔の効果、味、飴の形、大きさ、滑らかさなどを検討し試行錯誤して作りました。味は鼈甲飴に似てまあまあ美味しくて、舌や喉の感覚をこれまでの方法よりずっと麻痺させることができると考えています。十分に試してみる価値が有ると思います。

この麻酔キャンディの安全性は当院の倫理委員会に認証されていますので、やがて使用できると思います。★具体的にいつから